

なぜ自分の体が差別の理由に？ 文学から考える 「生理の貧困」

『夜明け前』 『武家の女性』 など

生理用品が買えなくて学校へ行けない少女たちがいる。コロナ禍で立ち現れた「生理の貧困」という言葉に衝撃を受けました。その言葉は長い間タブーでした。昔はどうしていたのでしょうか。

最古の『古事記』には、スサノオ尊が美夜受比売を訪ねたけれど、「襲(おすひ=衣)の裾に月たちにけり」と、立ち去ったとあります。

平安時代『蜻蛉日記』の作者・道綱母は「不浄ゆえ」と、たびたび京や大津の山寺にこもって憂さを晴らします。

明治維新を描いた藤村の『夜明け前』には、馬籠本陣のおかみは代々、その時が来ると裏の小屋で煮炊き寝泊まりして過ごす、と書かれています。

初代の女性労働局長を務めた山川菊栄も、著作『武家の女性』では生理については言及していません。

アンネナプキンが1961(昭和36)年に発売され、私たちはず



細見 三英子さん

ジャーナリスト

産経新聞社記者としてナイロビ国連婦人会議や北京女性会議などを取材。フリーに転向後も、女性や家族、教育問題などを中心に手がける。大阪市男女共同参画審議会会長、大阪市政改革本部専門委員などを歴任。

いぶん解放されますが、この数千年に及ぶ母たちの人生に思いを致すと、なんだか胸が熱くなります。

自分の体、自分の中の自然であるものが、貧困や差別の理由になるのはおかしい。この新しい言葉を、みんなでおおいに論じたいものです。

『夜明け前』 第一部(上・下) 第二部(上・下)
島崎藤村 / 著 新潮社 / 刊



「木曾路はすべて山の中である」の書き出しで知られる歴史小説。著者の父をモデルに、幕末から明治の激動の時代を描く。

『武家の女性』
山川菊栄 / 著 岩波書店 / 刊

女性運動家の著者の随筆。幕末の武家で育った母から聞き取り、当時の女性や子どもたちの生活を映し出している。

身体の不調や葛藤… 相手を知ろうとすることは 大切にすること

『生理ちゃん』

助産師として性教育をする際の生理の話は、必須項目のひとつ。生理って一言で言うと簡単に聞こえますが、実は生理痛や不妊やPMS、女性同士でも理解し合えない現実や社会問題など多くの問題を孕んでいます。

例えば、生理痛の辛さって、自分以外誰にもわかってもらえないんです。人によって症状も重さも違う。これは性教育をするときにどう伝えればいいのか悩むところでもありました。

そんなときに出会ったのが、小山健さんの『生理ちゃん』というマンガです。

生理という現象を擬人化することで、こんなにわかりやすかつキャッチーに、生理とはどういうものなのか、生理が来るとどんなダメージがあるのかを伝えることができるのかと大変感銘を受けました。

しかも、作者は男性というところにも驚きました。男性の性欲を表した「性欲くん」というキャラも登場します。性別によらず、



上原 沙希さん

フリーランス助産師

助産師として、産婦人科勤務と並行しフリーランス助産師として、教育活動やママ向けコラムの発信などを行う。クレオ大阪中央の10、20代の相談室「女の子のためのクレオ保健室」でアドバイザーを務める。

心身ともに不調や葛藤がある事に気づかされます。また、それには理由があって、お互いに知ろうとすることはお互いを大切にすることなのだと思わす作品だと思います。

思春期の子だけでなく大人にも、そして男女関係なく読んでほしいおすすめ作品です。

『生理ちゃん』 1~4巻
小山健 / 著 KADOKAWA / 刊



「生理痛」「イライラ」「頭痛」「PMS」…。そんな女性の悩みを擬人化したキャラクター「生理ちゃん」が活躍するマンガシリーズ。2019年には二階堂ふみ主演で実写映画化された。